



Title	Missing : 「物語」を導入した地域プロモーション映像の試み
Author(s)	高橋, 紀子
Citation	デザイン理論. 2022, 79, p. 72-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86319
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Missing

「物語」を導入した地域プロモーション映像の試み

高橋 紀子 福井工業大学大学院在学

本作は、一般社団法人 日本映画テレビ技術協会主催「第 38 回 青い翼大賞」ドラマ（撮影・照明技術）部門にてグランプリを受賞し、文化庁委託事業「令和 2 年度 次代の文化を創造する新進芸術家育成事業 大学連携による映画人育成のための上映会 S.T.E.P.」（2021 年 3 月）に選抜され、新宿 K's cinema にて上映された映像作品である。本作の特徴は、「物語」を導入し、映画的手法により地域プロモーション映像の新たな表現を試みた点にある。

本作で試みた 3 点の映像手法

発表者はこれまで、地域資源の記録とその魅力の発信を目的とした地域プロモーション映像の制作手法を研究テーマとし、主に次の 3 点を特徴とする手法の追求に至った。

- ①「物語」を導入することにより、日常的な風景を異化し、鑑賞者の記憶に訴求する
- ②「喪失と再生」をテーマに設定し、失われた地域資源や今後失われる可能性を意識的に描く
- ③映像表現における時間性に着目し、様々な時間性を多層に構成する

以下で、それぞれについて説明する。

①地域資源を映像化する場合、景勝地の風景や伝統産業の生産風景などをドキュメンタリー映像として表現する手法が一般的である。しかし、発表者が在住する福井県は、戦災と震災により伝統的な景観資源を大きく喪失した街である。そこで「物語を用いて今ある福井県の風景をモチーフに、失われた景色を想う映像を記録する」表現を試みることにした。

「今ある風景」を最大限に活かす手段として本

作では、福井県内各地の風景をつなぎ合わせ、「実在するが実在しない、登場人物たちが暮らす架空の街」に仕立てている。さらに福井県の典型的な観光スポットとされる場所は避け、発表者が日ごろ日常生活のなかで魅力を感じてきた風景をロケ地に選択した（図 1）。これは見過ごされがちな日常の風景の魅力に別の角度から光をあて、「物語」を通してその価値を描くことを目指したからである。



図 1 ローカル鉄道がつくる風景（福井市）

②上述のように、地域資源をモチーフにした表現と記録を目指す映像制作では、「喪失と再生」は地域資源の喪失が顕著な福井県（あるいは同様の地域）にとって重要なテーマとなると考えた。

これを踏まえた本作の物語の概略を示す。

『鉛のように重く暗い曇り空に覆われた冬の地方都市・福井県に僕（三浦太輝）は暮らしていた。そんな僕の隣にはいつもアレ（山本康介）がいた。ある日、7 日後に期限が切れる定期券だけを僕に残し、アレは消えてしまう。僕は、忽然と消えてしまったアレを振り返りながら自分の中に沈めていた「ある想い」と向き合っていくのだった』

主人公の僕にとって大切だったアレの不在をめぐって「物語」は進行していく。本作にとって「物



図2 主人公の心象風景を象徴するシーン（国道8号線）

語」は、風景をより鑑賞者に印象づけるための手段としての意味が大きい。登場人物たちへの没入感が強すぎれば、風景への意識が弱くなる可能性があると考え、登場人物の心情を描く際にはできるだけ風景に委ねる表現を試みた（図2）。

③本作では、「今後失われていくであろう撮影時の風景」（ノンフィクション）や「物語上の登場人物たちの失われるであろう若さや学生時代という一瞬の輝き」（フィクション）、「物語」が誘発する鑑賞者の過去の記憶など、様々な時間性を意図的に重ね合わせた。このように時間の多層構造による表現手法をとることにより、現実の風景を撮影しただけでは表現できない、鑑賞者の無意識の領域にアプローチすることを狙った。

制作プロセス

本作は、合計11日間で撮影を行った。メインカメラは、「pocket cinema camera 4K (Black magic 社)」とし、特に空の風景を象徴的に描くカットの撮影に使用した。また、サブカメラとして機動性の高い「HERO 7 (Go pro 社)」を使用した。

キャスティングは、「人」という地域資源を活かすことを考慮し、プロの俳優ではなく福井県在住の大学生2名、高校生1名をキャスティングした。演技経験のないキャストの自然な魅力を引き出すために、セリフは同時録音せず、スタッフ数を抑えるため脚本・監督・撮影・照明・録音・編集すべてを発表者が兼任する体制をとった。また、編集においては、カラーグレーディングに注力した。福井県の冬の空を「喪失」を免れた景観資源とし

て着目し、青灰色の透明感ある色彩表現により、独特の光が印象に残る演出効果を意図した。

エンドロールの仕掛け

エンドロールでは、アレの眼差しを通して撮られた風景や僕の写真が映し出される仕掛けを施した。



図3 僕にカメラを向けるアレが鏡に映る（福井市）

本編では、僕という主人公の一人称視点だった「物語」が、エンドロールではアレの一人称視点の「物語」へと反転する。僕の想いに対するアレの答えを、鑑賞者だけが知ることができる効果を狙い、鏡をモチーフとして描いた（図3）。「物語」では喪失していく二人の関係だが、想いは消えることなく在り続けるという「再生」のイメージを潜在意識に訴えかけ、登場人物たちの仄かに明るい未来を暗示させる結びとした。

おわりに

当たり前のように存在する風景は、常に喪失の危機に晒されている。本作の撮影時には日常の風景であったいくつかのロケ地も、コロナ禍により徐々に変化し、ゆるやかに失われつつある。映像により地域資源を記録することは、未来の鑑賞者に向けての地域プロモーション映像でもある。地域資源の価値を発見するまなざしと魅力を発信する映像制作手法を、今後も追求していきたい。

参考文献

高橋紀子・川島洋一、地域資源の映像化における物語表現の試み 短編映画「Missing」の制作、日本デザイン学会 デザイン学研究作品集 (26), pp.40-45, 2021.3.